**№35　テーマ『人間的魅力の形成』**

**講話日2009年7月27日**

**皆さん、こんにちは。なかなか梅雨があけませんね、本当に毎日蒸し暑い状態でお仕事も大変だと思うんですけど、健康に気をつけて頑張ってください。今日のテーマは、人間的魅力の形成ということで、今年の1月に人間として本物とはなんなのかということを話して、そのときに人間の格というものがどういう風な原理でつくられていくのか、ということを話しました。人間の格が謙虚さと成長意欲と愛という三つの原理によって、だんだんと人間の品格、内容が整ってくると、そのことによって人間しか持ち得ない魅力がだんだんと備わってくるわけですね。人間的魅力というのは、どういうものなのかということなんですけど、魅力というのは人を感動させることができる要因のことを指します。人間として何かしら格というのができてくると、そのことが人に感動あるいはすごいなと人を感心させたり、いろいろ内容的に出てくるわけなんです。**

**とにかくプロとして金を取って仕事をする、金をもらって仕事をするということをするからには、金を出すお客さんの方が惜しみなく金を出したい気分にならないと、プロとしての仕事とは言えない。やはり、プロというのは、「さすがにプロですね」と言わせることに価値が出てくるわけです。「これだけの仕事をしてくれたんだ。だから請求書通りの金を出すのは当たり前だ」と、快く金を出してくれる。そこにプロの仕事の値打ちがあるわけであります。何らかの意味でプロというのは、客に感動を与える内容を持っていないといけないという風に言うことができるわけです。よく感動が大事だということをおっしゃる方も多いんですけど、もちろん感動することも大事なんですが、だけど感動するというのは、命の自然であって、人を感動させる力を持って実力というのである。感動するのは命の機能として備わっているわけなんですけど、人を感動させるということはなかなか難しい。人を感動させる力を養ってこそ実力、人間的価値と言うことができるわけであります。**

**その意味では、社会において仕事をしていくからには、何らかの意味で人を感動させることができるような内容というのを、自分だけにつくっていくということを考えなければなりません。でないと、プロの価値がない。何をもって人を感動させ、その人に「さすが」と言わせるか。そういうことをやはり心しながら自分を成長させて、鍛えていくということをやっていただきたいと思うんですね。人に「さすが」と言わせる何かを持たないと、金を人から取って、そして仕事をするという値打ちが出てこない。快く人に金を払わせる力がプロの値打ちですからね。会社の仕事とは別に自分自身が何かしら自分自身を鍛えるため、成長させるための努力をする、ということが大事になってくるんじゃないかと思います。これは単にお客さんの問題だけではなくて、仕事というものはお客さんにもあるいは一緒に働く仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方ができてプロということができます。客だけに喜んでもらっても、これは本当の意味で社会の中で仕事をしていくという組織人としての実力はない。やはり一緒に仕事をしている仲間にも喜んでもらう、「お前さすがや」と言ってもらう、そういう何かを自分自身が身につけていく。そういうことも人間として楽しく、生きがいを持って人生を生き、また生きがいを持って仕事をしていくことに喜びを感じながら仕事をしていくためには、自分自身の中にそういう客にも仲間にも「さすが」と言わせるようなものを持つことが、自分の存在感をつくって楽しく生きていくための状態にするための基本条件ではなかろうかと思います。**

**そういう意味で、今日は人を感動させることができる要因と言える人間的魅力はどんなものなのか、を体系的に話させていただきたいと思っております。**

**人間的魅力ということを学問的に考えるためには、どういう手順、道筋かと言うと、人間というのは理性・感性・肉体という三つの要素から成り立っています。であるがゆえに、人間には理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力という三つの魅力のフィールドがあると考えなければなりません。一般的に書店に並んでいるような人間的魅力について書いてある本というのは、学問的な体系性がなくて、ただ立派な人物を捉えてその人物の素晴らしさ、魅力というものがどういうところにあるのか、ということ書いてある本がほとんどであります。多分、皆さん方も体系的に人間的魅力とはなんなのか、ということを本で読んだことはないのではないかと思います。私の哲学は感性を原理にして、人に感動を与えるということが非常に重要なテーマですので、感性=感じる力、感動する力を具体的・実践的・体系的に考えていくと、そこから感動の要因あるいは感動をさせる要素というものが、どういう風に人間に構造的に備わっているのか、ということが見えてきます。そういう体系的に考えていくための基本が、人間は理性・感性・肉体の三つの要素から成り立っているんだと。その有機的な連関によって命はできているんだと。だから人間には構造的に理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力に三つの魅力の要因がある。要因というか、フィールド、分野があると。そして、さらにそれを細かく分けていくと、理性的魅力にも三つの要素があり、感性的魅力にも三つの要素があり、また肉体的魅力の三つの要素があって、全部で三つの領域の中に三つの要素がありますので、全部で3×3ということになって、銀河鉄道999というわけです。9つの魅力があると、冗談めかしてギャグっぽく言っているわけであります。**

**では、具体的に理性定期魅力とは、感性的魅力とは、肉体的魅力とは何なのかを考えてみると、理性的的魅力の中にはどういう魅力があるのか…レジメにも書かせていただいたように、まずは人を感動させることはができる要因として、知識の量というものがある。人並外れた知識量というのは、「すごいなお前」と言ってもらえるようなものがあるわけです。プロというのは、素人から見て「さすがだ、プロはよく知っているな」と言ってもらえることも、やはり仕事上信頼されるということの要因となってくるわけです。そのためには、今自分のやっている仕事に関わる知識をとことん求める努力をすることが大事。そのことによって、人を感動させる力を持てることになるわけです。だけど、知識というものが人を感動させるという力を持ってくるためには、ひとつだけ条件があります。それは、どれだけ勉強していろんなことを知っていて、東大に合格するような人でも、そういう人皆が人を感動させるか、と言ったらそういうわけではないんですよ。**

**人を感動させるには、どういう条件が知識の量に付け加えなければならないのか。その知識というものが命から湧いてくる興味や関心や好奇心や認識力といった欲、命から湧いてくる力によって獲得された知識しか、命を輝かせない。魅力をつくらない。命から湧いてくる興味・関心・好奇心や認識欲とか問題意識とは無関係に、ただ受験や就職といって、いろんなことを覚えても、命を曇らせて獲得された知識であるがゆえに、命を曇らせてしまって却って魅力を奪う働きをするわけであります。だから東京大学に入ったからといって、皆が魅力的な人間ではない。本当に魅力的な人間、人間的魅力を持った人間というのは、ごく少ない。命から湧いてくる興味・関心・好奇心、認識欲、問題意識、そういうものによって獲得された知識というのは、「なんでだろうな」と思って調べて、「そうか」と分かると、命が喜ぶんです。命が喜ぶと命が輝く。そのことによって魅力が出てくる、人に魅力を感じさせるという姿が湧き出てくる。それが、無理矢理に覚えたものであって、苦しませながら理性的に無理矢理に覚えた知識というものは、命を苦しめています。そのことによって、まあなんちゅうか本中華冷やし中華ですね。なんかこう命の輝きを奪うような、楽しくない感じになってきますので、そうするとなんとなく人にもその苦しみが伝わってしまって、あまりそのことによって感動を覚えるとかあるいは素晴らしいと感じる魅力としての価値を持ってこないんです。是非、いろんなことに興味・関心・好奇心、そういうものを持って、また問題意識を持って、自分の命からは湧いてくる欲求というものに対応して、知識を獲得していく。そういうことが非常に知識の量が、人を感動させる魅力を持つための基本的条件と言うことができるわけであります。**

**その意味でも、仕事のことだけではなく、いろんなことに対して興味や関心や好奇心を持って、自分が興味を持ったものについて本当に自分が納得するまで、とことん興味を辿って求めていくことをする生き方が非常に大事であります。あの釣りバカ日誌という映画があります。あの浜ちゃんとスーさんが出てくる。社長さんがスーさんで浜ちゃんは社員なんです。浜ちゃんは釣りにかけては、本当に誰にでもちゃんと教えることができる素晴らしい専門家でして、社外に出ると浜ちゃんは釣りの先生で、いろんな会社の社長さんに趣味としての釣りを教えてあげている。それにより他の会社の社長さんが浜ちゃんを尊敬している。そのために、社長さんのスーさんは建設会社の社長さんなんですけど、会社の仕事にも浜ちゃんが持っている人間関係が有利に働いて、たくさん契約を取ってくる…みたいなことになっています。釣りにおいて浜ちゃんはすごい、これが実用の商売にも非常に役立ってくる。そこに人を感動させる要因を持った人間の魅力・価値というものがあるわけであります。だから決して仕事ですごいと言われなくても、趣味ですごいと言われてもいい。とにかく何かしら「すごいなお前」と言われるようなものを何か一つつくるという努力が、やはり人生で大事な課題ですね。まずとにかくは、知識の量。何かのことに関してはすごい知識を持っているというのが、非常に大きな魅力になってきます。**

**理性性的魅力の第二番目ですけど、それは知恵です。命から湧いてくるものなんですよね。知恵で人を感動させることができるということが社会にはあります。普通、皆が悩む、回答が出てこないときに、あるひとりの人物が提案をする、その提案によってトントンとうまくことが運ぶとなると、「あいつはすごいな」となるわけです。知恵というのは、命から湧いてくる力と言えるものです。確かに知恵者というのは人を感動させる。知恵というのは、知らないけども分かってしまう。できないけれどできてしまう、というもの。知っている、できるというのは、努力して理性的につくった力ですけど、知恵というのは知らなくても考えていたら、ふっと湧いてきて「こうではないかな」という具合に出てくるもの。知恵とか気付きというものが命から湧いてくれば、多くの人が困っている問題に対して、提案をして多くの人を助けてあげることができる。また会社でのいろんな問題に対してもアドバイスをして、その問題を解決することに関わることができる。非常に重要視されます。人に頼られることにもなります。**

**では、どうしたら知恵者、知恵が湧いてくる人間になれるのか。知恵や気付きが湧いてくるとは、潜在能力が出てくることを指します。潜在能力とは、生まれながらに全ての人に与えられている力。具体的には染色体の中にある遺伝子。遺伝子とは能力が物質化したもの。知恵や気付きにより湧いてくる答えというのは、生まれながらに全人類、共通に与えられている遺伝子。それが潜在能力の実態であります。だから、方法論さえちゃんとわかったならば、誰でも知恵者になれる。誰でも潜在能力が湧いてくるという命の構造になっています。どうしたら、知恵者になれるのか。人が困っているときに提案できるのか。その力をどうしたら持てるのか。そのためには、今自分が持っている理性能力で仕事をしているという段階ではダメなんですよ。今自分が学校で勉強していること、会社に入って学んだこと、持っている力である理性能力で仕事をしている分には、知恵は湧いてこない。現状の力で事足りるのなら知恵は必要がないから出てこない。構造的には今自分が持っている知識ではなんともならない、学校や会社で習ったり身につけたもの、力ではなんともならない、万策が尽きた…という状態になり、とは言え、このままでは放っておけない、なんとかしないといけないと思い頑張っていると、命に潜在する能力が出てくるという順番が来るわけです。このことを知っているか知っていないかで、随分と人生が違ってきます。世の中で成功した人間というのは、例外なく知恵者です。理性では成功できません。理性では新しく出てくる物事に対応していくことができないためです。**

**なぜなら、理性能力というのは他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、そして自分のものにして使っていくことですから、パクリとも言えます。本当の自分の力ではないんです。しかも、他人がつくった知識や技術ということは、過去のものですから新しく起こる未来の問題に対応しづらいんですよ。基本的にはできない。本当に我々が新しく起こってくる現実の問題に、ちゃんと対応して乗り越えていく力をつくっていこうと思ったら、どうしても命から湧いてくる知恵の力というものを必要とするわけです。それがないと、なかなか今までなかった問題に対応していくということは出来ない。とにかく現実の社会というのは、過去になかった新しい問題がどんどん出てきます。なかなか過去の知識では対応できない。会社の業務でも新しい問題点が出てくることが体験的にはあると思うんですよ。または他人は体験していても、自分は未体験だということもあります。自分にとって新しい体験、問題に負けないで乗り越えていくには、どうしても持っている力ではダメなので、新しく知恵や気付きが湧いてくる状態の自分というものをつくってかないと、逞しく現実を生き抜いていく自信や力は出てきません。**

**そのために何が一番大事になるかと言ったら、答えは全部生まれながらに命の中にあるんだ。そして母なる宇宙から自分に生まれながらに与えられているさまざまな答え、潜在能力なんですけど、それを引っ張り出そうと思ったならば、どうしても自分の持っている力ではなんともならない、という問題に挑戦しないといけない。それを限界への挑戦と言います。今自分の持っている力の限界に挑戦するということをしないと、新しい力が命から湧いてくることはない。とにかく、毎年毎年スポーツ選手では世界記録を出したり、日本記録を出したりしますけど、皆はどうして記録を出せるのかと言えば、限界への挑戦なんですよね。これまでの記録の限界に挑戦しようという意欲を持って頑張る。そのことにより、命から力が湧いてきて、新記録が出せる。つまり、知恵や気付きを湧いてこさせようと思ったら、今自分が持っている知力に挑戦する、気力に挑戦する、体力の限界に挑戦する。限界への挑戦という生き様が、人間に知恵や気付きが湧いてくる状態に成長させてくれる基本原理だという風に言うことはできるわけであります。**

**そういう力をつくっていくためにも、これは前回お話をしたんですけども、「問題には答えがある、答えのない問題は出てこない。どんな問題でも常に答えはもうあると言うか、答えを引き出すために問題が出てくるので、問題が出てくる以前から答えはあるんだ。どういう答えを引っ張り出すかということによって、どういう問題が出てくるかが決まるだけ。そういう構造である」と、前回お話しました。大事なことは答えが出るまで努力を止めない。うまくいくまで努力を止めない。成功するまで努力をやめない、という粘り強い生き方をしていかないと、知恵や気付きが湧いてくるという構造を命の中につくり出すことはできません。生まれながらに母なる宇宙から与えられている潜在能力というのは、全部答えなんですよ。人間においては命の中にあるものしか出てこない。ないものは出てきませんから。だけど宇宙からすると、人類がこれからまだまだ何万年、何十万年と歴史をつくっていくことになるわけですけども、その人類が滅びるまで人類が地球上で生き抜いていくために、さまざまな問題を乗り越えていかなければならない、その問題に対して必要な答えというのは、全部生まれながらに宇宙から与えられているわけですよね。我々は宇宙から与えられている答えというものを引き出しながら人間として成長していく、という命の在り方になっているわけです。学校で言えば、2年生になれば1年生のときにはなかった問題が2年生に出てくる。それは1年生のときにつくってもらった力では答えられないんですよね。だから、なんとか問題を答えようとしていくと、その新しい力が要求されてくる。そこで学校では、2年生の問題を解くための力を命から引き出す、引っ張り出すためのさまざまな方法を教えてもらって、やがて新しい問題が解ける自分に子どもたちは成長していく。これが学校の教育の在り方であります。常に学校というのは、毎年毎年限界の挑戦ということを先生がさせてくれている。だからどんどん命に存在する能力が毎年毎年新しいものが出てくる。高学年になればなるほど、より難しい問題が解けるという状態に成長させてもらっているわけであります。**

**これが社会に出て行ってしまうと、無理矢理に成長させられる学校のシステムがなくなるものですから、ほとんどの人が今自分の持っている力でできることはしようとするけども、今自分の持っている力でできないことはできません、と簡単に断ってしまって、挑戦しようとしない。そういう状態でなかなか新しい問題に対応できる力が出てこなくて、競争に負けてしまったり、あるいは問題を乗り越えられないで自ら挫折し絶望してしまいやすい。だけども、大事なことは今自分の持っている力でできることしかしようとしないようでは、常に現実は変化して新しい問題が出てくるわけなので、今自分の持っている力でできることしかしようとしないようでは、たちまちにしてやはり現実社会においては敗残者になってしまう。現実から遅れてしまう。常にやはり皆さん方もやってらっしゃるでしょうけど、新しい知識や技術に挑戦していって、また現実も仕事のさまざまな進歩・発展に遅れないように、新しく要求される知恵や技術を吸収していく努力をしないと、現実についていけないということになってくるわけです。**

**だけども、そういう変化に対応して、要求されるものを吸収していくというだけでは、これは問題の後追い。既に誰かがつくった答えを自分が学んで、後からついていくとなってしまいやすい。会社の中に入ると創造力が大事だと言われるんですけど、創造力が大事だというのは、結局は知恵が大事だ。気付きが大事だと。今我々が持っている力でなんともならない問題に対して、提案をできる人間が創造力のある人間なので、そういう人間を会社は要求しているんですよ。そのためには、ただただ時代の発展に応じて新しい知識や技術を吸収していく保守的な努力だけでは、本当に会社が要求する創造力のある人物ということにならない。会社が要求する創造力というのは、誰も解けない問題を「こうしてみたらどうでしょう」という提案ができる人間が創造力のある人間として企業は要求するわけであります。そういう力を知恵や気付きと言うわけです。そうなると、知恵者だと重んじられる。**

**とにかく、我々は皆、何のために生まれてきたのか。それは歴史をつくるため。新しい時代をつくるために生まれてきたんだ。新しい時代をつくろうと思ったら、今までの人間が誰もやったことないことをしていかないと、新しい時代はつくれない。要求されるのは知恵、気付きなんです。既に誰かが持っている知識や気付きを持っているだけでは、歴史をつくるとは言えず、保守的な現状維持の状態になってしまう。そういう意味で問題に挑戦する醍醐味、誰も解けない問題を解ける力というのを自分が持てるような、そういう人物になりたいという気持ちを是非持ってもらって、知恵者という魅力を自分のものにしてもらいたい。そうすれば、会社の中でも大きな存在感が出てきますよ。実際に会社が発展していくためには、そういう社員が何人かいなければならない。多分アサヒグローバルさんにも知恵者と言われるような仕事の仕方をしている方が何人かいらっしゃるはずなんですよね。そうでないと、こんなに発展しませんからね。他社と同じでは競争に巻き込まれてしまって、業績が上がらない。他社とは違った答えを出していかないと、他社とは違う発展というのは成し遂げられませんから。必ず皆さん方の中に知恵者がいらっしゃるはずなんです。ある特定の人だけが持っている力ではなくて、方法論をちゃんと使えば誰でもできる。努力すればできる魅力なんです。知恵という力で人を感動させる。そういうことも是非誰にでも可能性があるわけですから、考えてみてもらいたい。**

**第三番目の理性的魅力は、天分。全ての人間に生まれながらに与えられている素晴らしい力。何回もお話をしてきましたので、「言われなくてもわかっています」とおっしゃるかと思うんですけど、天分というのは能力の個性。どんな人にも必ず天分がる、というのは何によって証明できるか。それは顔が違うということによって証明されるんだ。顔が違うということは、自分には他の人にはできない何かができる。顔が違うということは、自分にしかできないことがある。それが顔というもの価値・意味であります。では、なぜ顔が違うということが天分の証明なのか。天から分け与えられた能力ということなので、天の仕事の一端を担えるような力を持っている、そんなすごい力が全ての人間に生まれながらに与えられているんだ。そのことを証明するのが顔である。それはなぜか、顔の形を決定するのは遺伝、つまり遺伝子。遺伝子というのは、能力が物質化したもの。物質化した遺伝子によって人間の顔の形が決まって、そして顔の形は全人類全部違う。ということは、顔の形が違うということは自分には自分にしかない独特の才能・能力があるということを証明している、という結果になるわけです。だから、顔が違う限りは自分には他の人間にできない何かができる。人間誰しも、「俺が最高！」というものを持っているんだ。皆誰でもオンリーワンという形で世界一になれるんだ。「自分しかできない」ということをすれば、今の時代においては世界一だと言える。そういうものが出てくるわけであります。**

**天分というものが顔の形で表現されているということによって、なぜ我々は他の人間ができないまたは過去の人間が誰もやったことがない、新しいことができるということになるのか。違った面からの証明は、我々は過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。生まれてくるということは、お父さんとお母さんの遺伝子をもらって生まれてくるということになりますから、だから人間は誰でも親を超えて生まれてくるんだ。過去の人間のふたり分の可能性を持って生まれてくるから、子どもは必ず親を超えることができる。だからいつの時代でも、「今の若い者は頼りにならない」と言われるんだけど、その若者たちはあっという間に大人たちが知らない未来をつくってしまう。今までになかったものをつくってしまう。今までではできないことをやってしまう。それが歴史の現実であります。**

**なぜ、年長者から見て頼りにならないと言われている若者が年長者を超えて、その人も知らない未来をつくれるのか。それは、ただお父さんお母さんから遺伝子をもらってくるだけでは、遺伝子は過去のものですから、未来をつくる力を持てないんですけど、なぜ過去にない新しいものをつくれたり、過去の人間ができなかったことをできるということになるのか。それはお父さんお母さんからもらった遺伝子が、自分の命の中で有機的に絡み合って、その相乗効果として湧いてくるものが、その子の力なんですね。相乗効果、シナジー効果だから、出てくるものは全く新しい力。過去になかった全く新しい力。お父さんとお母さんの遺伝子が絡み合って出てくる力というのは、それぞれ異なる遺伝子ですので、全く違います。だから、その子の力というのは、この時代においては他にない独特の一個限りの個性のある力ということになってくるわけです。そういう意味で、誰でも他の人間にはない独特の力を持たざるを得ない。そういう構造に命はなっております。それが天分の魅力なんです。**

**だけど、天分というものも言ってみれば潜在能力のひとつなので、基本的には今自分が持っている理性能力でいろんなことをやっているという状態では、天分は絶対に出てこない。天分が出てくるということになるためには、やはり我々は今自分の持っている力ではなんともならないという状況にならないと、自分の個性ある能力を引き出すことは出来ない。まずは自分の持っている理性能力でいろんなことをやってみて、今自分の持っている力ではなんともならないという高度な領域にぶつかるということが要求されてきます。そういう最先端の領域にぶち当たって、しかもそこであきらめないで「だけど何とかしたい」と思って頑張っていると、そうすると自分の命に存在する力が湧いてきてくれるということになってくる。天分もそのようにして出てくるんですけど、だけど一般的に知恵が出てくるということと、天分が出てくるというのは、出てき方が違う。天分が出てくる状態に自分がなるためには、最初から天分があるところで努力をしていないと天分は出てこない。**

**知恵や気付きというのは、ただ限界への挑戦という原理で出てくるが、本当に自分独特の力というのは…普通の潜在能力は生まれながらに全人類に与えられていて、出てくるものですけど、天分というのは自分にしかない力です。そういう状況になろうと思ったら、天分のあるところで頑張ってないといけない。天分のあるところとはどんなところなのか。天分の発見方法ということですが、これもこの研修で何回もお話をしたことなんですけど、どうしたら天分のあるところが分かるのか。5つの方法があります。**

**やってみたら・やらせてみたら好きになるかどうか。やってみたら興味・関心が湧いてくるかどうか。やってみたら得手、得意なことだと思うかどうか。他人と一緒にやってみたら、いつも自分の方がよくできてしまうかどうか。真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくるかどうか。この5つの方法でいろいろとやってみて、そして、やってみたら好きだと思えるというところが自分の天分になるところなんですね。やってみたら興味・関心が湧いてくる、そこは天分になるところなんだ。やってみたら得意と思える、そこが天分のあるところなんだ。他人と一緒にやってみたいつも自分が勝ってしまう、そこに天分がある。真剣にやってみたら問題が湧いてくる、そこも自分の天分のある場所なんだ。そういうところで頑張っていて、そして今自分の持っている理性能力でなんともならないという状態になったとき、諦めないでさらになんとかしたいと思って頑張っていると、ただの知恵ではなく天分が湧いてくる。そして誰にもできない何かができる。そういう独特の才能を発揮する人間になれるわけですね。だいたい野球ならイチロー、将棋なら羽生というのは、天分のあるところで頑張っていたんですよ。イチローも羽生も常に順風満帆でやってきたわけではなかったはずです。何度かスランプや難関にぶつかって、それは越えられないというところをやってきたんだけど、好きだからやめないで何とか頑張ってきて、それにより天分が引き出されてきて、誰も真似ができない独特のやり方を獲得したから、誰も真似ができないプレイができるようになっていったんですよね。これもやはり皆に天分があるんですから、そういう努力の仕方さえ分かったならば、誰でも天分を発揮して自分にしかできない仕事をやってみせて、皆を感動させるができるわけであります。**

**とにかく、こういう魅力づくりもただ安閑と仕事で頑張って努力しているだけではダメなんですよ。やはりちゃんと目標を立てて、頑張ることをしないと人間的魅力をつくり出すという結果に結びついていきません。そういう意味で、知恵が湧いてくる知恵者になろうという目標を立てて頑張るか、天分を発揮できる自分になろうと思って頑張るか、あるいは人を感動させるほどの知識量を持った人間になろうという目標を立てて頑張るか。目標を立てて頑張らないと、そうならないですよ。ただ安閑と頑張っている、努力しているというだけではダメなんだ。会社でも本当に誠実に真剣に真面目に仕事をしている中小企業はたくさんありますよ。だけど、発展もしなければつぶれもしない。ただ存在するだけなんですよ。そういう会社はいっぱいあります。発展する会社というのは、ちゃんと目標を設定するんですよ。未来に向かってちゃんと目標として設定して、その目標を実現するために頑張るということするから、会社は発展するんですよ。人間も同じなんですよ。ただ頑張っているだけでダメ、ただ誠実だけではダメ、ただ真面目だけではダメ。それは現状維持なんだ。未来に対して目標がないとその方向性に成長するという力が出てこない。**

**とにかく、人間的魅力というのは3×3=9、9つあるんですから、だからその内のどれを自分の魅力にしようかということを自分なりに決める。そして、その魅力を持つことができる自分になるための努力の仕方というのが分かって、それを実践していくことによって、その魅力は自分のものになっていく。だから、ある程度これは教育的なことを学んで、その方法論に従って生きるということをしないとできてこない。会社の発展も人間の成長も皆、同じ原理なんだ。どういう自分になりたいのか、ということを決めないとそうなれない。なんとかなるというようでは、これは流されているだけ。変化をするかも知れないけど、成長はしない。とにかく、人間的魅力という観点から、理性的魅力にはどんなものがあるのかということを考えると、知識の量と知恵と天分、この三つのものが理性的な努力を原理にしてつくられていく、また出てくる人間的魅力と言うことができるものです。やはりプロとして仕事をしていく上で目標にしなければならない人間的魅力の領域です。**

**とにかく人に「さすが」と言わせるというものを持たなければならない。何を持って人にさすがと言わせるか。そのことを是非、皆に考えてもらいたい。目標を立てて努力していないと、そうなりませんからね。ただなんとなく頑張っているだけでは、毎日真剣に誠実に真面目にやっているだけでは、魅力は出てきません。与えられた仕事があるだけではなくて、自ら目標を立てて、そして目標を実現するための努力、それを自分なりにしていく。それは自分で自分を教育するというやり方です。会社に入って上から言われる仕事をしているだけではダメ。自分でこうなりたいという目標を立てて、その目標を実現するために自分なりに会社の要求とは別個に頑張る。そうしないと自分の魅力というのをつくることはできません。まずは人間的魅力の中に知識の量と知恵と天分、この三つの魅力があることを知っておいてもらいたい。**

**その次は感性というフィールドにある魅力になっていきます。感性的魅力、感性の世界は理屈を超えた世界ですから、理性ではなんともならない。そういう領域に存在する魅力。その中には人を感動させることができる魅力が三つある。それは、意志の力、愛の力、人間性、この三つが理屈を超えた領域において人を感動させることができる要因です。意志の力が人を感動させるというのは、どういうことなのか。よく言われる不撓不屈の意志。どんな困難でも乗り越えていくという不撓不屈の意志、困難、問題に負けない。そういう問題・困難・苦痛に負けない、そういう強い意志=不撓不屈の意志とも申しますけど、不撓不屈の意志の力というものが人を感動させることができる。「あんなに辛いところ、よう頑張るな」という形での感動を人に与えることができるということですよね。そのためには強い意志の力をつくる方法論をちゃんと知っていないといけない。方法論、原理をちゃんと知っていないといけない。**

**まず意志が強いとはどういうことなのか。これまでの哲学、人間観では意志の強い人というのは理性的な人なんだと言われてきたんですよ。意志の強い人というのは、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことを最後までちゃんとできる、というそういう我慢できる人間というのを意志の強い人と言っていたんです。我慢できないやつはダメなやつ、我慢できる人間が立派な人間なんだと、そういう人間観だったわけです。だけども、理性で自分のしたいことを我慢して、しなければならないことがちゃんとできる、という理性でつくる作為的な人為的な意志の強さには限界がある。なぜならば、自分のしたいことを我慢するというのは、既に意志というものには限度がある。人間的に、作為的に、人為的につくった意志の強さというのには限界がある。自分のしたいことは我慢して、しなきゃならんことをちゃんとできるというのは、自分が苦しくなって「もう頑張れない」という状況になってくると、理性は作為的に止める理由を考えて、ちゃんと止めてしまうんですよ。理屈でつくった意志というものは、理屈という弱さがある。やる理由も止める理由も理屈で考えてしまう。だけど我々が本当に望む意志の強さは、不撓不屈。それはどんな困難でも乗り越えるもの。そこには、理屈抜きの根拠がないといけない。**

**では、意志の強さにおける理屈抜きの根拠とはなんなのか。それは命から湧いてくる欲求の強さ。理屈抜きに湧いてくるからこそ、理屈抜きに困難を乗り越えていく不撓不屈の意志となる。なぜならば、人間は命から湧いてくるものがある限り、行動をやめない。命から抑え難き欲求が湧いてくれば…欲求というものはやりたいという力。つまり、それがある限り行動をし続ける。興味・関心・好奇心、欲求・欲望が湧いてくれば、かっぱえびせん状態です。どうにも止まらない。やめられない。不撓不屈の意志により、寝食を忘れる状態になる。寝ることも食うことも忘れてしまって、「もうこんな時間!? 」と。そういう力が出てくる、これが抑え難き欲求に支えられた人間の意志の力。これから我々は、立派な人間というのは、理性的な人間ではない。立派な人間というのは、欲望の強い人間。欲求の強い人間。という、新しい人間観を持たなければならない。これまでは理性の優れた人間を立派だと言ってきた。だけど、理性の優れた人間は必ず対立を生んでしまう。また人をバカにする。他人を尊敬できない。自分がすごいと思うから、他人を見下す。理性は弱い、限界がある。理性は人間的な力ですからね。**

**これまでの人間観では、理性は完全の能力なんだと考えられていました。理性というのは神から人間に与えられた能力なんだ、合理的に考えることができる素晴らしい能力だと言ってきたんです。だから、理性的な人間になることを目標にして教育が行われ、頭のいい人を尊敬する状態で今日までやってきました。だけど、頭のいい人間が今社会を混乱させている。真理はひとつだと考える、だから違った考えの人間を受け入れない。受け入れないから離婚が激増する。宗教が違ったら戦争になる。殺し合う。これは、理性を原理にした人間の生き方がつくり出した現実であります。理性は人間のつくった能力で、決して神から与えられた能力ではない。命から湧いてくる欲求は自分がつくるんじゃない、独りでに湧いてくる。宇宙の根源から湧いてくる。欲求こそまさに宇宙の力だ。宇宙から湧いてくる欲求がないと人間の肉体は動かない。前々から申しているように理性能力というのは、人間が生まれてから後に言葉を覚えて、言葉と言葉を事実に合うように結びつけていくと、合理的に考える力が脳に備わる。それが理性。理性能力は後天的に人間がつくる人間的な能力なんだ。だから、人間的な限界がある。**

**どういう限界かと言うと、合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力。これまでは理性能力は、神から人間に与えられた完全無欠のロックンローラーだと思っていましたからね。人間は不完全なんだから、我々は完全なる理性に従わなきゃならない、と考えて人間は理性で考えることを実践してきました。これにより、理性の奴隷となってしまった。そして人間性が破壊された。血の通った温かな心がなくなってしまった。血の通った温かな心は何なのかと、分からなくなってしまった。それが今の人類の現状であります。理性によって心が破壊され、非常に冷たい理性的な判断しかできない状態になってしまって、またそれが正しいんだと思っているから厄介なんですよね。理性で正しいと思ってやってきた結果、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊というものが起こって、離婚の激増、幼児への虐待、高齢者への虐待、そして戦争、血の通った温かな心を持ってない人間にしかできないことをしてしまっている…これが理性によってつくられた現実であります。**

**理性能力というものには限界がある。それは人間がつくった人間的な能力なんだ。だから人間は決して理性に支配されてはならない。理性を支配しながら、手段能力に使って生きていかなければならない。そういう生き方がこれからつくられていくことになるわけです。人間は理性もあるけど感性も肉体もある。だから人間は理性よりも高次元の存在なんだ。理性のような単純な存在ではなく、複雑で高度な存在なんだ。理性は人間の持っている能力のひとつに過ぎないから、人間が理性を支配しないといけない。理性を支配しながら我々は人間らしく生きるという生き方をして、初めて血の通った温かな心を取り戻すことができる。とにかく、意志の強い人間は理性的な人間ではない。本当に意志の強い人間は欲求の強い人間なんだ。命から抑え難きものとして湧き上がってくる欲求が強い意志をつくってくれる。欲求のない人間は意志の強い人間になれない。だけど、多くの人が「そんな強い欲求は自分の命から湧いてこない…」という状態になってしまっているんです。ちょっとした欲求は湧いてくるけれども、抑え難きものは全然ない。いかに理性によって自分をコントロールするということに慣れてしまっているか。皆、私も含めて理性の奴隷なんだ。どうしたら一体我々は自分の命から抑え難き激しい欲求を引き出すことができるのか。そのことを考えてみなければならない。本当に不撓不屈の意志というのを我々が持って生きようと思ったら、そういう魅力的な人間になろうと思ったならば、自分の命から抑え難き欲求が出てくる状態にどうしたらできるのか、ということを考えないといけない。**

**そのためには、理性を手段能力に使って自分の命に問いを発する。どういう問いなのかと言ったら三つあります。「どんな人間になりたいのか？」「どんな仕事がしたいのか？」「将来、どんな生活がしたいのか？」という三つの問いを自分の命に理性を使って発して、そして自分の命から「俺はこんな男になりたい」「私はこんな女になりたい」「俺はこんな営業マンになりたい」「私はこういう先生になりたい」「こんなことがしてみたい」「将来はこんな生活がしたい」そういう欲望・欲求を自分の命から引っ張り出す。そういうことを繰り返している間にだんだんだんだん自分の命から激しい欲求が湧いてくる。本当に「俺はこんな男になってみたい」という欲求が沸々と自分の命から湧いてきたならば、まさにそれを実現することが、その人の自己実現であり、それを実現することがその人の幸せなんだ。そうなってきて、それが実現されるまで行動をやめない、やり続ける。そういう生き方が出てくることになるわけであります。とにかく、理性を手段能力に使って、自分の命から欲求・欲望を湧き立たせる。そういうことをしないといけません。とにかく、命から欲求が湧いてこないと、自分からは何もしないんだ。与えられたことをさせられてしまうという生き方になってしまう。これでは仕事にも喜びがない。人生にも生きがいがない。本当に自分のしたいことをすることが幸せであり、自分の喜びになるわけですから。**

**それともうひとつの原理は、欲求を呼び覚ます原理は人間の本質である心というのは、意味と価値を感じる感性だ。人間は意味を感じないとやる気にならない。やる気が湧いてこない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない、燃えない。行動力が湧いてくる、命が燃える状態になるためには、意味と価値を感じないといけない。そのために、今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考える。理性が感じたものは、必ず感性が感じ始める。感性が意味を感じたら激しい欲求が湧いてくる。興味。関心が湧いてくる。それにより行動力が出てきて、そしてやめられないとなる。意味と価値を感じるためにも、意味と価値を考えないといけない。そうして感性が成長する。そして、感性が感じたとき、命に火がつく。そのようにして欲求をつくるのです。このふたつの方法しかないです。どちらかで燃えるような生き方ができる自分をつくらないといけない。とにかく、欲求・欲望が湧いてこないと燃えない。理性では燃えられない。**

**燃える生き方をする原理はふたつしかない。命から欲求・欲望を引きずり出すか、あるいは意味と価値を感じるか。意志の強い人間は抑え難き欲求が湧いてくる人間。理屈抜きに湧いてくるから、理屈抜きに行動できる。欲求が強い人間が意志の強い人間かと言われると、そうではない。欲求と意志には次元の違いがある。欲求・欲望が強いだけでは、野獣。意志となってはじめて人間的なものになる。欲求と意志はどう違うのか。**

**欲求は動物と共有する次元のものであります。それでは野獣なんだ。意志の強い人間になろうと思ったらどういうことが大事になるか。意志とはなんなのか。例えば、「金が欲しい」だけでは、野獣なんですよ。けれども、金が欲しいという欲求が湧いてこないと、金を儲ける活動は始まりません。では、どういう風にして金を儲けるかは理性で考えるんだ。金を儲ける方法は仕事をすることもありますし、宝くじを買う、競馬・競輪もある、カツアゲもあるし、強盗もある…どの方法で金を手に入れるか、それを決めたときに意志が決まるんです。理性で欲望を実現するための方法を考えて、方法がひとつに絞られたとき、意志が決まったとなる。その段階で人間的な行動になるわけです。金をつくる方法を間違っていたら犯罪になる。犯罪になってしまったら金は儲かりませんから、警察に捕まったら失敗ですから、警察に捕まらないように。他人に邪魔されないようにどうしたら金を儲けることができるか。皆のことを考えて人間的な金を儲ける方法が出てくると、我々は成功できるわけです。**

**どういうことなのかと言ったら、欲求と意志との間には理性による決断という行為が介在する。いろいろ方法を考えて、この方法で金を手に入れようと考えることは決断することなんですよ。方法論をいろいろ考えて、あるひとつの方法を決める。決断によって意志の強さが決まる。意志の強さそのものを決定するものが欲求なんですよ。欲求の強さと大きさが意志の強さを決める。意志というのは欲求そのものではない。意志ができるためには理性による決断が必要になってくる。決断とはなんなのか。いろいろな可能性の中からどれを選び取るか、そう辞書には書かれています。けれども、選び取るだけでは、決断の決だけで決めただけ。断、何を断つのか。それが分からないと本当の意志はできないし、本当の意志の強い人間にはなれない。決断とは、あるひとつのものに決めたならば、そのとき自分が選び取らなかったものの中にどんなに素晴らしいものがあっても、あるひとつのものに決めたならば、その想いを断ち切る。退路を断つ。「これしかない」という決め方をすることを決断と言う。決断とは捨てる勇気だ。**

**結婚でも、ある人と結婚しながら他の人にまた思いを残しているようでは、結婚生活はうまくいかない。本当に幸せな結婚にするには、決断をしないといけない。ある人を選んだならば、選ばなかった人の中にどんな素晴らしいものを持っている人がいても、他の人への想いを断ち切るということが結婚の価値であります。多くの人は本当の決断としないで、ある人を選びながらも他の人への想いを残している。あるいはその人に本当に惚れて好きになって結婚したとしても、結婚してから問題が出てくると、「この人と結婚したからこんな問題が出てきたんだ。ひょっとしてあの人と結婚していたらこんな問題は出てこなかったのに」ということを考えてしまう。これが選んだだけで断ち切っていない人間の宿命なんですよ。断をしていないと必ず悔いが残る。**

**問題が出てくるとこれは間違えたと思って、ひょっとしたら向こうが良かったのではと思って迷い始める。これが決断をしていない人間の陥る不幸であります。本当に我々が成功と幸せを確実に手に入れようと思ったら、決断しなければならない。あるものを選んだならば、その他のものへの想いを断ち切る。決めたならば、どんな問題が出てこようと問題をバカになってしらみつぶしに乗り越えていくしかない。そのとき本当に不撓不屈、どんな困難でも乗り越えていくという人生が始まる。そのことによって人間は本当の幸せと成功を手に入れる。成功した人間は問題を乗り越えただけなんだ。乗り越えられなくなったときに人間の成長は止まる。本当に成功しようと思ったら、本当に幸せになりたいと思ったら、決断をしなければならない。問題から逃げない、そういう人間だけが悔いのない幸せと本当の成功を手に入れられる。これが不撓不屈の意志を持った人間の凄さ、素晴らしさなんですよ。とにかく、理屈を超えた感性で最初に人間を感動させる力は強い意志の力、不撓不屈の意志。これがまず人を感動させるように大きな要因になります。というところでちょっと休憩を入れます。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**感性という領域における感動の第一番目は意志の力でした。意志の強い人と欲求の強い人間なんですけど、欲求だけではまだ意志ではない。意志の強さをつくっていこうと思ったら決断という理性的な働きがその中に加わってこなければならない。だけども、意志の強い人間というのは理性的な人間かと言ったら、意志の核になるものはやはり欲求ですからね。欲求が理性化されて意志になるのであって、その意味では意志の強い人間の本質は欲求・欲望の強さだ、ということを忘れてはなりません。まず命から湧いてくる欲求をつくる。命から湧いてくる興味・関心・好奇心の強さ・大きさをつくっていく。そのことが非常に行動、仕事をする上でも非常に大事な課題であります。今自分のやっている仕事の意味や価値観や値打ちや素晴らしさを感じる。それによりやる気が湧いてくる、欲求が湧いてくる、興味が湧いてくる。そういうことをしていかないと、仕事をとことん結果が出るまでやり抜いていく、どんな苦しみや困難にも負けない、どんな困難でも乗り越えていく不撓不屈の意志はできない。とにかく、仕事で人を感動させるということになるためには、結果が出るまでやめない。うまくいくまでやめない。本当にお客さんを納得させる、納得してもらえるまで努力をやめない。あるいは仲間から認められる仕事の結果が出るまでやめない。という力が「すごいやつやな」という感動を呼ぶことになるわけであります。**

**次の感動の要因は愛の力。人間は深い愛に感動する。愛とは何なのか。愛というのは他者中心的な心遣い。相手を中心にして心遣いをする。心遣い、思いやり、これが愛の基本的な構造であります。相手を中心にして心を使うということはどういうことなのか。具体的には、愛というのは実践的な行動からすると、努力だと。相手のために努力するという行動が愛を証明する。相手のために努力できなくなったら、その人への愛はなくなってしまったんだ。相手のために努力する気持ちがある限り愛は存在する。そして愛の感動というのは、相手のために自己犠牲的な努力を払う。そこに愛の感動が生まれてくる。相手が自分のことをどの程度愛してくれているか、相手がどの程度自分のことを好きなのか、これがどうしたらわかるか。相手がどの程度自分のために自己犠牲を払ってくれるか、そのことによって相手がどの程度自分のことを好きなのかが分かる。自分が相手のことをどの程度愛しているのか、自分が相手のこと好きなのかを知るには、自分がその人のためにどれだけ自己犠牲的努力が払えるか。そのことによって自分の相手に対する愛のレベルが上がるんだ。人はそういう自己犠牲的努力という愛の行動に感動するわけです。それが愛の深さ。**

**とにかく、人の親というものは子どもを産んでから本当に涙ぐましい自己犠牲的努力というものを自己犠牲と思わずに、子どものためにさまざまな努力をして、苦しみを味わいながら子どもを育てて生きていくわけであります。それが親の愛の真実だ。そのことを子どもが分かってくれば、本当にお父さんお母さんありがとうと感謝できる。どの程度、相手に対して自己犠牲的努力を払えるかというところに愛の感動が生まれてくるか、生まれてこないか、そういう違いが生じる。組織では組織論からよく言われことですけども、部下のためになら死ねる上司の元にしか、上司のためなら死ねるという部下は育たない。部下のためになら一肌も二肌でも脱ぐという上司の元に、初めて上司のためなら…という部下が出てくる。これも愛がつくり出す、理屈を超えた人間関係。いわゆる兄弟仁義と申しましょうか、兄貴がやるなら俺もやらざるを得ない。それは理屈ではない。兄弟仁義ということは知っているかと思うんですけど、男同士の腹の内という理屈を超えた人間の心の結びつきというのは、まさに相手に対して自己犠牲的努力を払うということによるもの。これほどのことをしてくれたんだ、それを恩に感じて、それほどのことを相手にしないといけないと。そういうところから兄弟仁義という理屈を超えた心の結びつきの人間関係が出てくるわけですね。**

**そういう意味では愛の感動というものは、どの程度の自己犠牲的努力を相手に対して払うことができるか。そういう行動というものによって証明されるし、つくられてくる。そのためにやはり、本当にただその個人を愛するだけではなくて、人間への愛というものがベースにないと、組織上は部下のためならというえこひいきなく、全ての部下に対して心遣いをするという愛は出てこないですよね。そのように人間を愛する、人間が好きだという気持ちが、まずないといけない。人間を愛するということは、非常に内容としては複雑なところがあって、本当に部下のためなら…という気持ちは、部下が失敗したとき、部下が何かしら問題にぶつかって困っているとき、そういうときに何かしら手を差し伸べてあげるという状態で一肌脱ぐとなるわけなんですよ。これは共感同苦というか、相手の苦しみを我が苦しみとして感じる、相手の悲しみを我が悲しみとして感じる人間性、心情というものが、具体的に愛の働きとして大事なんですね。人の悲しみ、苦しみを関係ないとするようでは、本当に人を感動させるような愛を持った人間にはなれない。本当の人の悲しみを分かるためには、自分もまた人生において本当の辛い状態を通り抜けた体験がないと、人の苦しみも悲しみも分からないですよね。**

**そういう意味で、人の悲しみ、苦しみが分かる共感同苦、共感同悲、という相手の気持ちが感じられる、相手のことを思いやる気持ちになるためには、それ以前に何かしら自分の中にも辛い体験・苦しい体験が要求されてくる。ということは、自分がいろいろ苦しい、辛い立場に立ったとき、人間への愛というものを自分が持てる人間に成長するための体験を与えてもらっているんだと考えて、その悲しみを悲しみ抜く。また苦しみを苦しみ抜く。また辛さに耐えて生きるという気構えが要求されてくるわけです。悲しいときにはその悲しみの中に自分の命を置いて、悲しみを悲しみ抜く。そのことによって人の悲しみを感じることができる自分ができてくる。苦しいときにはその苦しみを味わい尽くす。本当に地獄の苦しみを味わった人間だけが、人の苦しみの辛さを本当に分かってあげることができる。そして本当に苦しいときには、「頑張れ」とか励ます言葉ではなくて、本当に苦しいときには「そうだよな、辛いよな。お前の辛さはわかるよ」と言ってあげるのが、本当の愛の言葉であります。「頑張ろう」という言葉というのは、案外と理性的な表面的な言葉であって、本当の共感同苦、相手の苦しみを我が苦しみとして感じるということにはならない。共感することが本当の愛。共に悲しんで涙を流す。励ますのではなくて、相手が涙を流しているときに共に涙を流してあげることが、本当の愛の表現となります。理性的な人間にはなかなかそれができない。本当に悲しくなってくれば涙も出てくるんだけど、その悲しさを理性で理解しているだけでは涙は出てこない。葬式に行っても、「お体に障りませんように」など、理性的に考えたことをいろいろ言うんですけどね。だけど、それは理性で考えたお付き合いの事例であって、本当に相手が感動するのは、涙を流してくれた姿なんですよね。だけど、涙を流そうと思ったら本当に相手が感じていると同じ悲しみを感じないと、涙は流れてきません。そういう共感同苦、共感同悲、相手の苦しみを我が苦しみとして感じ、相手の悲しみを我が悲しみとして感じる、という血の通った温かな心というものが、最近なかなか出てこない。涙を流すのでも演技であったり、本当に相手の辛さが分かるという涙ではないようなこともあります。**

**本当に人間を愛するということが深い愛に基づいてなされるには、人間への深い理解というものが求められてきます。それは、誰でも長所半分短所半分。だから人間を愛するということは、長所も短所も愛することなんだ。相手の短所を責めないで相手の短所を助けてあげる、補ってあげる。決して短所をなくさせようとするのではなくて、短所が出てきたら嫌われるから、出てこないように注意をしないといけない、という心遣い。短所が目に付くのは長所が伸びていないからだから、短所を責めないでその人の良いところを伸ばしてあげようとする関わり方、それでも愛の関わり方ということになるわけです。そういうことのために関わって努力してあげる。そのことによって人は、「あの人に出会えてよかった。あの人に出会えて俺は蘇ったんだ」という感動を覚えたりするわけであります。「あの人に出会えてから俺の人生変わった。あの人に出会わなかったら俺は今どうなっていることか」と、人の愛を感じるわけですよね。そのためには人間への深い理解というものが要求されてくるわけです。短所はなくならない、短所を責めるところには血の通った温かな心は存在しない。罪を犯し、また道を外れて不良になった、そういうことがあってもそれを責めるところには血の通った温かな心は存在しない。「多分、そういうことをすることになるためには相当辛い、悲しい出来事、体験が過去にあったんだよね。一体何だったの」と聞いてあげる。「本当につらいよな」そんなことがあったら、そんなことをしてしまうのも、暴走してしまうことになるのも無理はない。「辛さはわかるよ」という言葉で人は救われて、本当に分かってくれる人に出会えたと思って、そこから人間は復活するんです。「頑張れ」とか「悪いことをしてはいけないよ」という理性的な言葉では人間は救われない。本当に分かってくれたという共感に人間は救われて、そして自分を責めないで自分の現状を認めて許してくれるという人の心に支えられて、人間は立ち上がるわけです。これが理屈を超えた感性の世界の深さ、人間味のある愛の対応となってくるわけです。とにかく、誰でも長所半分短所半分。短所はなくならない、長所は伸びる。それを頭に入れながら、その人にどう対応してあげるかというところから、血の通った温かな心の対応が出てきたりするわけです。**

**誰でも人間は自分の心を本当に満たしてくれるものを求めている。皆心が欲しい。では、心をあげるということはどういうことなのか。誰でも愛されたい、認めてもらいたい、褒めてもらいたい、分かってもらいたいと思っている。それが心が欲しいということ。愛されたい、認めてもらいたい、褒めてもらいたい、分かってもらいたい、その心に応えてあげる行動、言葉を発するならば、我々はその人への愛をあげる、心が欲しいという叫びに応じて心をあげることができる。それにより、だんだんと人間のいろんな物事に対する対応の仕方が変わってきて、そして人に感動を与える。本当に喜びを与える。そういう言動ができる人間になることができるわけです。そういう意味でも、相手のために努力するあるいは自分が自己犠牲的努力を払うことが基本。だけど相手のために払っている自己犠牲を自己犠牲だと思っていたら、それは愛ではないんです。相手のために自己犠牲的努力を払いながらも、自分が相手に対して払う自己犠牲的努力を自分の喜びと感じるところに本当の愛の深さが出てくる。「俺はあいつの犠牲になった」と思っているようでは、そこには愛はない。相手のために努力していながらも、その努力を喜びと感じる。これは実際に恋愛においてよくあることですけども、愛する彼氏のために女の子は夜も寝ないでセーターを編んだりして、それを誕生日プレゼントする。相手が喜んでくれる姿を想像しながら、夜も寝ないでセーターを編む。そういう努力は、客観的に見たら辛い努力でも本人にとっては喜びなんですよね。そこに愛というものの証がある。よく映画なんかでも愛する男がピストルで撃たれて殺されるというとき、発射されたと同時に男性を愛する女性がその前に飛び出して、銃弾が女の人に当たってね、その女の人倒れる。そうすると助かった男の方は、女の人の元に駆けつけて、抱きかかえながら「大丈夫か」と言うんですよ。決して大丈夫ではないんですけどね。女の人はもう死んでしまうのに、自分が愛する男性に抱かれているということに喜びを感じて、「ありがとう」まで言ってしまう。笑顔を浮かべてカクンと逝ってしまう。そういう映画が時々あるんですけども、それが一種、自己犠牲。命を捨てることすら喜びを感じ、相手が助かったことを喜んで自分が死んでしまう。**

**それほどのことがなくても、それに近いようなそういう相手のために自己犠牲的努力を払いながらも、その自己犠牲を自己犠牲と感じていない、それを喜びとして自己犠牲的努力ができるところに愛の素晴らしさがあるわけです。これは誰でも人の役に立って相手が喜んでくれたら自分も嬉しい、という愛の心情が皆にあるわけですよ。職業というのは、皆、お客さんのために努力して、お客さんが喜んでくれたら「良かった」と自分の仕事に満足感が出てくる。職業は愛の実践ですから、仕事の中にも愛の感動があるわけです。本当にお客さんが喜んでくれたという結果が出るまで、あれこれ頑張って努力をして、相手が納得してくれたことに自分もやりがいを感じて喜ぶ。自分の自己犠牲的努力というものを喜びとしてそれをする。そういう仕事の仕方をすると、客は「あいつはすごい。よくやってくれたな」と言って、その社員の努力に感動する。そんな客との心の繋がりができるということもよくあるわけです。愛は自己犠牲的努力を相手のために払う自己犠牲と思わないで喜びとしてそれを行う。そこに愛の感動が生まれてくる原理がある。お父さんお母さんは決して恩着せがましいことを言わないで子どものために頑張る。だから愛は美しいし、素晴らしいんですよね。**

**それを会社の中の組織においても、心のつながりをつくっていくための言動として恩着せがましいことを言わないで、相手のために、部下のためにいろんな努力をしてあげる。そういうところに部下が上司の心遣いや行動に感動する。そうして心の結びつきができていく。これは理屈を超えた人間の美しい行動ですよね。理屈を超えないと感動は生まれてこない。ギブアンドテイクの精神がちょっとでも滲んでいたら、そこに感動は生まれてこない。案外、恋愛の中でも「これだけのことをしてやったのだから、これだけのことしてもらわないと困る」みたいな恋愛では、これは理性的な恋愛ですが、それでは本当の愛は育たない。やはり、親の愛というのは子のために尽くし切って、全く見返りを考えてもいない。そういうところに人間の愛の美しさというのがあるわけですよね。だけども、全く見返りを考えてないと、あまりにも神仏みたいに思うかもしれませんけど、だけどもやはり、親の愛というのは本当に子どものために辛い努力をしながらも、その子どものためになっているという喜びを感じてやっている。本当に見返りを求めないような、そういう愛の姿というのは、たくさんのお父さんお母さんの行動に中にあるし、見られるわけです。そのことを子どもが感じたとき、本当にお父さんお母さんの前にひれ伏して、「ありがとうございました」と言って涙を流して喜ぶ。とにかく、人間の感動させる要因の中に深い愛に基づく感動がある。その基本原理は、自己犠牲をしても自己犠牲とは思わない。それを喜びとする。そこに愛の感動が生まれてくる、という原理です。基本的にあらゆる職業は愛の実践である。その中にある程度、自己犠牲的努力というものがなければ、職業の中に美しさは出てこない。お客さんを感動させるほどの自己犠牲的努力、会社が終わっても夜中にお客さんのところへ訪ねていく。大雨が降ったら自分が手掛けた建物へ飛んでいく。そういう要求されたものではなく、自主的に客のためを思って為す自己犠牲的努力に感動したりするわけです。自己犠牲的努力を喜びとして行動できるような力というものも、人間的な素晴らしい美しい行為だ。**

**その次は人間性。人間性が人を感動させる。人間性に感動するということがあるわけです。人間性の感動とは一体何なのか。人間性とは、基本的に性格と人格の絡み合いでできるもの。人間性は性格という格と、人格というか格が絡み合って人間性という世界が生まれてくる。その意味では、人間性に対する感動というのは性格というものに感動することもあるし、人格というものに感動することもあるんだけど、だけども実際には性格と人格が絡み合って出てくる人間性というものが、感動の対象になるわけなんですけどね。では、性格とはなんなのか。性格は自然にできてしまうもので自分でつくるものではない。気がついた時にはこういう性格になっていたもの。性格は自分では変えられないし、性格は自分でつくれない。なってしまうもの。自分ではどうしようもない。性格こそまさに個性の象徴なので、どんな性格でもそれはもう嫌だとかなんとか言わないで、それをもうそのまま自分が引き受けていくしかない。性格にはプラス面とマイナス面がある。性格にプラス面が出てくると人に好かれる。また人に「良いな」と感動を与えることもある。マイナス面が出てくると人に嫌われて嫌な思いをさせて、ということになってしまう。どうしたら一体性格の持っている良い面が出てきて、悪い面があまり出てこないようにできるか。そこに努力の必要性があるわけです。性格の良い面がどんどん出てきて、悪い面が出てこないようにするには、何をセントバーナード。そのためには、人格を磨くということをしないといけない。**

**人格には高さと深さと大きさがある。人格は人間が持って生まれてくるものではない。格というのは生まれた後につくるんですよね。後に人格をつくる、人格を磨く努力をすると、そのことによって性格の持っているマイナス面があまり出てこないようになって、プラス面がどんどん出てきて、そして人間性が成長する。人間性が人を感動させる形になっていくわけなんですよ。ということは、具体的に人格を磨くことは、高さ、深さ、大きさという魅力をつくるということになりますので、そういうことを考えると人間性が人を感動させるという基本原理は、人格が持っている高さが人を感動させたり、深さが人を感動させたり、あるいは大きさが人を感動させたりというのが主たる要因であると、言わなければならない。だけども、もう少し突っ込んで考えていくと、人格の高さ、深さ、大きさという魅力がつくられていくことによって、その相乗効果として性格というものの良い面が出てくる。そのことによって性格も好かれて、そして人間性が愛される。そういう意味では、その人の人間的な魅力・人間性が人を感動させるためには、我々は人格の高さが必要。すなわち、高貴なる精神。高く尊い精神・心・思いをつくっていく必要がある。高貴なる精神をつくる努力をする必要があるし、また「なかなか深いな」と感心させるようなものをつくっていく必要があるし、また人間の大きさも必要。大きさとは、器が大きいとか度量がある、包容力があるとか統率力があるとか。そういうものを目標にして、それを自分がつくっていこうとする努力をする。それが人格を磨く努力になってくる。そういうことをしていくと、確実に人間性というものが人に魅力を感じさせるということになっていく。実際問題、実社会においても多くの方が「なかなかあいつは深いことを言うな」と感動しますよ。また「なかなかあいつは器が大きい」と感動します。いろいろな人間関係、仕事上でも大きな価値を持って仕事の成果にも結びついてくるわけです。**

**「あいつは人間性が悪い」という場合には、だいたい性格が悪いという意味で使われるんですよね。心理学者の中には性格は変えられるんだ、ということをおっしゃる方もいらっしゃるんですけど、だけどそういう心理学者の人間観というのは、性格と人間性と人格というものを区別しないで、性格そのものを人間性だと思ってしまっている。人間性は確かに成長するんですよ。また人間性というのは、成長するという意味で変えることができる。だけども性格そのものは絶対変わらないんですよ。性格というのは、50%は遺伝。遺伝子によって性格が決まるんですよ。あとの50%は生まれてから後に自分が意識しない間に自分の命の中に積み重ねられていったものとして、それが性格となって反映される。これはどういうことなのかと言ったら、人間の命が地球上に単細胞生物が生まれてから今日まで約38億年間という年月があります。38億年間の間に自分の命に中に積み重ねられてきたものが、今の人間において性格として出てくるわけなんですよ。遺伝が決定する力を持っているのは、顔の形、表面に出てくるものの後天的でない部分は全部遺伝なんですよね。顔の形が遺伝によって決められているということ。そう考えると手相とか足相など、相というものが人間にはあります。相と言われるものは全部遺伝によって決まります。自分でつくるのではありません。全部これは遺伝によって出てくるもの。顔の輪郭も遺伝で決められる。38億年間ずっと積み重ねられてきたものが、肉体的に表現されたら手相とか顔の相になるんですが、それが精神的に表現されると性格になるんですよ。だから性格と手相とはリンクしている。遺伝という同じものが肉体的に出てくれば、相になるけど精神的に出てくれば性格になる。その人の手相を見たら性格が分かる。その人の足の裏を見たら性格が分かる。肉体的に出てくる相も、精神的、自分でつくれない性格というのは、リンクしているんですよ。そういう原理で易学が成り立つ。性格はとにかく50%は遺伝で決まる。自分で変えられない。もちろん性格も後天的に少しは変化するんですよ。だけども性格というのは、自分が意識していない間に自分の命に積み重ねられる体験・経験が反映されるんですよね。だから、手相も年をとるごとにちょっとずつ変わる。変わるが、自分では変えられない。そういう意味で性格は変えられないと言うことができます。性格もまた顔と同じように個性なんだから、その顔を引き受けて生きるしかない。性格も変えようとしないでそのまま引き受けて生きるしかない。**

**だけど、性格には長所短所がある。性格のプラス面もあればマイナス面もある。それが出てくると嫌われるし、問題が出るんだけど、良い面が出てくれば好かれるし、ことはうまくいく。良い面が出てくるようにしていくのが人生だ。そのために我々は人格を磨く。後天的につくり出すことができるものを用いて、マイナス面があまり出てこないようにという努力をセントバーナードなんですね。そういう方法で人間性も人を感動させることができる。人間性に感動するということは実際問題いろいろと現実にあるわけであります。これもやはり自分が努力してつくっていく人間的魅力という風に言うことができます。自分で自分の素晴らしいところを、何に目標を置いて自分を成長させていくか、ということも自分で決めて努力をしないと、その魅力は出てきませんからね。自分がどういう人間性を持った自分になるか、それは自分で決めないといけない。**

**最後は肉体的魅力。肉体も人間にとっては非常に大事な魅力の要因であります。皆、別にあれこれ申し上げることもなく、エステに行ったりスポーツジムに通ったり、いろんな美容的なことをしながら顔をきれいにしたり、髪型をきれいにしたり、体型を整えることをやってらっしゃるかと思います。形あるものは最終的に美を追求するということになっているんですよね。年配の奥様方が杉様なんてことを言って、杉良太郎の舞台を見に行きますね。あの流し目がたまらないと言って、客席を見渡した際に目が合ったなんてことを言って喜ぶ。「あの目がたまらない」と言われるなど、そういう魅力もあったりなんかして、本当に目も表情も態度も人間関係というのは、目・表情・態度で決まると言えます。どういう目で見るか、これも人間にとってものすごく重要な値打ちを決定する原理なんですよ。決して人を見下すような、人を批判するような、人を軽蔑するような、貧しいと言うか否定的な目で人を見てはならない。どんなものやどんな人に対する場合でも、その目には基本的に愛がなければならない。愛は肯定すること、そういう相手を肯定的に見るという目もつくっていかなければならない。目を鍛えて表情を鍛えて態度を鍛えていく。ものすごく大事な、職業上においても重要な課題なんですよね。客がその社員の方々の目に感動する、表情に感動する、笑顔がいいとか。あるいは態度・姿勢に感動する。そういうことから契約が取れるとか取れないということも多々あるわけですよ。もっともっと我々は目に魅力を与えるような修行をしないといけない。表情に魅力を与えるような修行をしないといけない。態度に魅力が与えるような修行をする必要がある。そういう意味では、人生は舞台であって、我々一人ひとりは人生という舞台の中で生きる役者なんですよね。演じるということはものすごく大事な成長の要因だと考えなければならない。今の自分を素直に出せばいいんだ、というだけでは成長はしません。成長していこうと思ったら、自分が理想とする状態を思い描きながら、近づくように演技する努力も大事なんですよ。**

**扇千景さんという方がいらっしゃいます。宝塚のスターから始まり、宝塚をやめて映画スターになって映画女優になり、そして国会議員になった。と思ったら党首になった。と思ったら、またいつのまにか参議院議長になっちゃった。そういう意味では国会議員としても位人臣を極めるというか、総理大臣と衆議院議長と参議院議長と最高裁判所の長官は、直接陛下に謁見できる、国民としてはそれ以上ないくらい高い位なんですよね。なぜ、扇千景さんがあんなに凄い出世をすることができたのか。政治家として何をやったかと言えば、何もやってないんですよね。大したことはやっていない。なぜ、党首になって、参議院議長なの？ と不思議に思うんですよね。あれは、演技しているんでしょうね。国会議員になったら映画に出てくるような、最高の主役になれるような国会議員を演じるんですよね。だから、すごい人に感動を与えるような国会議員の目つき、態度、表情になるわけです。党首になればそれに応じた目つき、表情、態度になる。演技しながら自分を成長させていくんですよね。参議院議長になったら議長を演じる。そのようにして地位を獲得していったと思うんですよ。我々も仕事において、映画に出てくるセールスマン、映画に出てくる社員というように、理想的な社員の姿を演じようと思って努力しないと成長しないですね。本当に人を感動させることができるような、そういう自分というものを社員としてつくっていくことは難しいです。今の自分を出したらいいんだと思っていたら、なかなか伸びない。伸びるために演技をしないといけない。夫婦も素晴らしい夫を演じ、素晴らしい女房を演じたら夫婦もうまくいくんですよ。またお父さんお母さんも素晴らしい親を演じる。そういうことをしたら子どもに感動を与えたり、尊敬する気持ちを持ってくれるかもしれない。人として演じるという生き方を覚えるのも、非常に大事な人間的魅力をつくっていくための方法です。人生は舞台、我々は皆役者だ。そして自分の人生の主役を演じる。そういう意味で今自分が置かれている地位・立場の最高の姿、自分を映画の主役に置き換えて考える…自分が理想と思うような行動や言動ができる自分をつくって努力も人間的魅力をつくっていくための大事な課題ですね。**

**最後の第三番目は、立ち居振る舞いの美学。行動の美学と言って、人間は動物である。それがゆえに動くことがその本質なんだ。だからその動きには価値がなければならない。美がなければならない。行動の中に魅力を与えなければならない。行動の魅力を行動の美学というわけですけど、そういう意味ではバレリーナにしても、パフォーマー、振り付けにしても、人間の行動に美を表現しようという努力は昔から続けられてきました。我々が仕事をしている姿にも一種、美を感じさせるものがなければならない。立ち居振る舞いの美学、これは武士社会の中では、時代劇なんか見たら分かりますように立ち居振る舞いにものすごく武士の家庭というのは求められてきました。そういう武士の凛々しさ、けじめのある立ち居振る舞いに外国人は魅力・美に感じて、日本人は尊敬されていました。江戸時代の初めに日本から行った使節団の武士、明治の初めに欧米に行った武士は、欧米人を尊敬させたと言われています。フランス人なんかでも日本の文化は素晴らしいと言って、日本の文化の影響を受けたような海芸術が生まれてきたということもあります。**

**立ち居振る舞いという日常の行動の中に、何かしら爽やかな美しさを感じさせる。そういう行動、仕事の仕方というのも求めていかなければならない、人間の品格ではないかなと思うんです。よく匠と言われるような芸術家の仕事場を見ると、仕事をしている姿に感動を覚える、美しさを感じる、ということもよく言われます。人間は動物ですから動くことがその本質の中のひとつに入っていますので、その動きの中に感動・魅力を感じさせるということを我々は職場において考えていったら、もっともっと感動の職場ということが出てくるような職場環境ができてきて、お客さんも感動させる。建物を美しくして感動させるだけではなくて、働いている人間が客を感動させるような立ち居振る舞いをする…そういうことも大事なことですよね。我々が食堂に何かを食べに行っても、ウエイトレスの方々が食事を運んでいる姿や作法が美しいと、もう一度行きたいと思いますよね。そうなると、商売の繁盛にも関係してくることになるのではないかと思うんですよね。そういう意味で職場における社員の行動が乱雑か、見苦しいか、美しいか、ということも職場環境の面で大事にしいなければならない価値・課題ではないかと思います。とにかく、我々がプロとして目指さなければならない、人を感動させることができる要因、さすがと言わせる要因として原理的に9つの魅力というものを考えることができるわけであります。このことを参考にしながら、では自分は一体どういう魅力を持った人間になろうか。何を持って人にさすがと言わせようか、ということを是非考えながら仕事をしていただきたいという風に願っているわけであります。今日はこれで終わります。どうもありがとうございました。**